

民具マンスリー

〔編集担当〕 樫村賢二 神かほり 角南聡一郎 浜野達也 加藤友子

〔編集協力〕 刈田 均 佐野賢治 鈴木通大 森本仙介

『民具マンスリー』のフォーラムとしての役割

角南 聡一郎

『民具マンスリー』刊行の目的は民具研究者、博物館関係者を中心として、民具に興味関心を抱く人々にむけて、情報発信をおこなうことである。

2021年度も前年度から引き続いて、コロナウイルス感染拡大の影響により、社会生活・経済活動に混乱をきたしたままでの、年度のスタートであった。この結果として、『民具マンスリー』関連の活動は、編集会議をはじめとして、対面かオンラインかで右往左往することとなった。しかしながら、Zoomを用いたオンラインミーティングの操作技術は、日々上達していき、デジタルツールを身体の延長として、使いこなせるようになっていったと感じた。

今年度は、54巻1号から12号までを刊行した。掲載原稿の内訳は、論考19本、民具短信8本、書籍紹介3本、連載「アチック・ミュージアムの民具コレクション」関係2本であった。論考のうち、博物館及び自治体所蔵資料及び展示関係として以下のようなものがある。武井成実「松本市立博物館の歴史と収蔵民具——重要有形民俗文化財を中心に——」（54巻1号）、守谷英一「山形県西置賜郡白鷹町の「半唐箕」」（54巻3号）、松下朋生「忘れ去られた民間信仰の再発見」（54巻4号）、山本原也「加古川の川舟三例——新部の渡し「太閤丸」を中心に——」（54巻7号）（写真1）、渡部圭一「近代琵琶湖の豎箏 前編」（54巻9号）、渡邊直登「戦時下における泥棒除けの松川達磨」（54巻10号）、西連寺匠「玩具・ビデオゲームの展示——愛荘町立歴史文化博物館の夏季特別展から——」（54巻11号）、刈田均「企画展「布 うつくしき日本の手仕事」を終えて」（54巻12号）、



写真1 太閤丸展示の様子（小野市立好古館）（山本2021）

北村隆雄「特許から見る鳥取倉吉の「千歯」から「太一車」産業への変遷」（54巻12号）。このように、博物館等の所蔵資料が、誌面で紹介され共有されることで、各地との比較が可能となる。それは本誌の目的の一つを実現できていると考える。また、資料が展示され活用されている状況を伝えるものも、展示や資料に対する反響がどうであったかを、読者はしることができる。

国外関係のものとして、中国貴州省の



写真2 台湾原住民族アミのカカワサン（神棚）（岡田 2021）

衣服を扱った、龍瑞月「貴州省黔東南ミャオ族の蠟染と藍染の様相」（54巻2号）と、台湾の先住民族に受け継がれた日本植民地時代の神棚を取り上げた、岡田紅理子「台湾の原住民族アミに受け継がれる神棚」（54巻9号）（写真2）がある。民具は当然のごとく、日本にだけ存在しているのではなく世界各国に普遍的にある。とすれば『民具マンスリー』誌面は世界各地の民具やモノを紹介する場であってもよいといえるだろう。また岡田の論考のように、近現代史の観点からすれば、旧日本植民地と日本との関係について、モノを通じて紐解くというアプローチも重要であろう。野々村明佳里「家庭への電灯の普及について」（54巻12号）は建築史学の立場から、照明器具について検討を試みている。本論考を読むと近現代における住の民具／モノ研究には、建築史学で蓄積された情報・研究が不可欠であることがわかる。

今年度、初の試みとして編集室メンバーによる座談会「日常へのまなざし——トイレを語る——」が54巻4号に掲載された（写真3）。本座談会の掲載をきっかけとして、日常生活に不可欠であるトイレや周辺の道具についての注目が高まることを期待したい。

また、日本常民文化研究所100周年記念事業の一環として、2013年近藤雅樹氏の逝去により、中断していた連載「アチック・ミュージアムの民具コレクション」を再開することができたことは、大きな収穫であった。



写真3 吊り下げ式手洗い器（平塚市博物館蔵）

■ 2021 年度の活動

『民具マンスリー』編集会議日程

日 程（通算）					
第1回(第399回)	2021年4月23日	第5回(第403回)	2021年10月22日	第9回(第407回)	2022年2月28日
第2回(第400回)	2021年6月4日	第6回(第404回)	2021年11月22日	第10回(第408回)	2022年3月28日
第3回(第401回)	2021年7月30日	第7回(第405回)	2021年12月17日		
第4回(第402回)	2021年9月17日	第8回(第406回)	2022年1月31日		

※オンライン開催